創誠健和

旭川中学校　学校通信　５月号

令和５年　５月　３１日発行

3年ぶり！ 笑顔はじける「修学旅行」

テーマ:「当たり前のことをExcellentに行い、臨機応変に対応しGood Memory をmakeしよう！」

昨年度までの修学旅行は、「バス移動、隣の席は誰もいない」「楽しいはずの食事、同じ方向を向いての黙食」「想い出に残る写真、遠慮しながらで、マスクがなかなかはずせない」等々、多くの規制の中、延期や中止も覚悟しながら実施してきました。

今年度についても多くの中学校は、感染症対策を意識し「函館」と「ルスツ」など、従来型の修学旅行が主流となっています。そのような中、本校の修学旅行は、保護者の皆様の理解を頂き、感染対策も意識しながら、旭中ならではの新たな価値の創出につながる、前向きで、有意義な体験が出来るよう、思い切って、新たな企画と行き先で実施しました。当然、主役は「生徒」です。

「非日常で共に学び・共に過ごす喜び」という、本質的な価値を大切にする旭中の修学旅行は、小中合わせた９年間の最高学年にふさわしい、多くの想い出づくりの場として有益な機会となりました。それは、アイヌ文化の復興と発展のナショナルセンター「ウポポイ」からスタート。差別のない多様で豊かな文化をもつ、活力ある社会を築くための象徴として整備された「ウポポイ」。加えて、胆振地域が有する多種多様な景観は、今も躍動する地球の営みが生んだ大自然のアートともいわれており、白鳥大橋とともに、体感することが出来ました。

室蘭名物の「焼き鳥丼」と「カレーラーメン」そして、登別やルスツ、ニセコの大自然、これらの景観を仲間とともに観て、感じて、その奥に秘められた魅力を、旭川にも多く残るアイヌ語地名と比較しながら、改めて、故郷の良さの再発見につなげることも出来ました。

本道ならではの名勝めぐりの後は、旅のフィナーレにふさわしい、新たな北海道のシンボル「HOKKAIDO BALLPARK F VILLAGE」で日ハム（赤黒で襟付きユニフォーム）vsライオンズ。６対３で見事に日ハムの勝利。キツネダンスやグルメとともに、完成したばかりの施設を満喫しました。

「バス移動で、隣の席に友人（仲間）がいること！」「生徒の歌声や笑い声が聞こえること！」「英会話を楽しみながら笑顔でDinnerを味わえたこと！」「絶叫マシーンで絶叫できたこと！」「87デシベルを達成できたこと！」「たくさんのお土産と想い出、そして友情を持ち帰ることが出来たこと！」本校の最高学年は、一回りも二回りも成長することが出来たと感じております。

新たなレガシーを後輩たちにしっかり受け継ぎ、規制のない学校生活をより充実させて参ります。

これまでに身に付けてきた多くの成果（時を守り、場を整え、礼を正し）が、学校を離れても使える道具となっていたのを確認することができ、旭中生としての素敵な振る舞いを実践できたことに、何度も、何度も、感動しました。

令和5年度の

『旭中フェス』の考え方について

本校の体育大会や学校祭は、一昨年度から取り組む手法を変更し、コロナ禍にあっても、想い出に残る、生徒主体の活動として変化してきております。昨年度は、「春フェス・秋フェス」として、ＰＴＡや地域の協力も頂きながら開催したところです。

そこで、規制や取り組みの制限がなくなった今年度は、ただ以前の学校行事に戻すのではなく、新しい形の学校行事を「旭中フェス」として開催することとしております。

また、保護者や同窓会の皆様もご来校いただけるよう、企画を進めて参ります。

旭中の教職員が目指す、コロナ明けの新たな実践としては、

１　変化の激しい時代を逞しく生き抜くために、変化に柔軟に対応する力を育むと同時に、自らが変化を創造する力を育むこと。
２　令和4年度に春フェスと秋フェスと分離開催していた学校行事を『旭中フェス』として統合し、生徒主体の学校行事へとアップデートすること。
３　フェスの実現に向け、１学期から準備を開始し、生徒会組織を活性化させながら、企画・運営等の一連の活動を通して、生徒の主体性や自律を促し、自己肯定感を育むこと。としました。

統合化した「旭中フェス」のイメージとしては、

◎実施　10月３日（火）・４日（水）を予定しています。
１日目：準備（前日放課後も可）、オープニング・スポーツ大会
会場（小中体育館）を想定〉
２日目：合唱コンクール、３学年の映像またはステージ発表、エンディング
※昼食は、１日目は持参弁当、２日目を調理師専門学校のバザーを想定

すでに、今月の生徒集会から、生徒会が企画する生徒主体の実践がスタートしています。

お楽しみに！